わこのみ
猫裁通信
第２６号
平成九年
（１９９７）
１月１５日 発行
（年４回発行）

正花覚書

東　明雅

連句における花の句は、多くの場合春季で桜の花を詠むことになっているが、その場合必ず「花」という語を用いなければならず、「桜」と言ったのでは、賞翫の意がないと言う理由から「正花」にはならない。逆に言えば「桜」という語の代わりに「花」と言う語を使った句ならば、大かた正花になり得るのである。しかし、たとえば「花のかんばせ」・「花の唇」などは「正花」であるが、これらは桜のイメージより、賞玩の意が強く、また「中華」・「花軍」なども正花として認められて来たが、これらはもともと中国渡来の語であり、桜とは殆んど縁のない語である。

また、同じ「花」の字を使っても、「作り花」・「絵の花」・「花鰹」・「花嫁」・「花婿」などは、花の正花にされず、「雑の正花」であるし、「波の花」・「火花」・「糀の花」などは「似せものの花」とされて正花とは認められない。

だから、新しい語を使って花の句を作られる場合は、従来猫蓑で用いられた正花・非正花のリスト（この文章の後半参照）を参考にされたらよいと思う。たとえば、「花前線」・「花泥棒」などは「桜前線」・「桜泥棒」の意であるから問題ない正花としても、「花電車」・「花札」・「花四天」はいかがであろうか。「花電車」は「花車」・「花見車」に似ているが、必ずしも桜の頃、あるいは桜見物の為の電車ではないから、「雑の正花」であろうし、「花札」も「花むすび」・「花靱」の類として、「雑の正花」に加えてもよいだろう。「花四天」は華やかなものであるが、演劇関係の語で、直接桜とは関係ないから、「花子の狂言」と同じく、「雑の正花」であろう。近頃「木花開耶姫（このはなさくやひめ）」を花の句に用いるのが流行しているが、これは、「木花（このはな）」が桜の雅称であるから、「春の正花」としての資格は十分であろう。

○春の正花　花を待つ・初花・花の蕾・花の咲く・花盛・花を降らす・落花・飛花・花散る・花便り・花の宿・花の席・花の隣・花莚・花の庭・花の山・花のもと・花の窓・花の戸・花の扉・花の都・花洛・中華・花畠・花園・花の幕・花の波・花の滝・花の雲・花の雪・花の錦・花ふぶき・花の雨・養花天・花冷・花の香・花の匂ひ・花ひら・花ふさ・花明り・花を宿・花を主・花を友・花宴・花軍・花見酒・花の随身・花守・花売・花作・花見・花人・花疲れ・花篝・花の枝・花の蘂・花の輪・花鳥・花陰・花皿・花籠・花入・花生・花瓶・花筐・花桶・花笠・花筒・花の盃・花の鈴・花車・花筏・花見車・花見船・花の縁・花の姿・花の顔・花の唇・花のかんばせ・花の肌・花鬘・挿の花・花の人・花に酔ふ・花の笑・花衣・花の袖・花の袂・花の踊り・花心・心の花・人の花

○他季の正花　夏・・余花・若葉の花・花田植・花氷・花火。　秋・・・花相撲・花灯籠。　冬・・かへり花。　新年・・餅花・年の花・花の春

○雑の正花　作り花・絵の花・花むすび・花靱・花形・花塗・花子の狂言・花鰹・灯の花・花毛氈・花嫁・花婿・詞の花・花やき・声花・花やか・花道・花舗・雪月花・花紅葉・花実・花言葉

○似せものの花（非正花）　波の花・雪の花・火花・糀の花・花野・六の花・花の富貴・花の隠逸・花の兄・花の君子・睡れる花・花かつみ・四ひらの花・風花

○その他の非正花　桜という語が正花として使われないのであるから、その他、梅・桃・藤・菊など、すべての四季の花も、それを梅・藤などと呼んだ場合は正花にはなり得ない。

新年明けまして
お目出度うございます

歳旦三つ物　東　明雅

初春の眼福にせん十牛図
畳に届く餅花の影
梅東風に人の心も和らぎて

平成九年一月元旦
（一九九七年）

羅浮亭　秋元　正江

杖曳いてあるく姿や恵方道
輪飾りつけし撫で牛の背
まなうらの花いっせいに開くらん

桃径庵　式田　和子

梅王が牛車とめるや初芝居
春着姿の孫と幕間
逃水に次の世紀の浮ぶらん

緑華亭　坂本　孝子

舞初や袂にあそぶ松の風
いざ召し給へ百薬の屠蘇
春の夢牛飼人に嫁の来て

梅香庵　副島　久美子

頬撫づる風に吹かれて恵方道
輪飾りかけし牛の彫刻
インターネット地球の裏に届くらん

梓庵　中川　哲

お降りや天明句集ひもときぬ
嬌声まじる弾初の会
青海波万物創世麗かに

一穂庵　中島　啓世

曾孫てふ愛しきもの得し去年今年
バルカローレであやす弾初
なつかしきフレスコ僧院かすむらん
（ルーマニア）

涼月庵　中田　あかり

初夢や含羞の夫学徒兵
畏まりたる床の輪飾
絵手紙に白梅一枝描かれゐて

片相聞

徳岡　久生

本歌取り。裁ち入れ。模倣。

褒貶は読み手の思いのさまざまと、後生であるものの表現それ自体の成否に依るのだろう。評価を抜きにして言えば、すべてこれ先人への思慕の挨拶。造語して「片相聞」。

連綿と余響を曳いた有名な例が、”世にふる時雨“である。

世にふるはくるしき物をまきのやにやすくもすぐる初時雨哉

新古今に二条院讃岐のこの歌がまず在って、

世にふるもさらに時雨の宿りかな　宗祇

世にふるはさらに宗祇の宿りかな　芭蕉

と続き、蕪村の

蓑虫のふらと世にふる時雨哉

までゆく。私にはどの発語もおもしろく、それぞれに心打たれている。

さて、世にふる時雨に蓑虫をぶらさげて、一刷きの俳画を描いてみせてくれた蕪村。この人はどうも、「片相聞」の名人だったように見える。その作のうちには、尊敬してやまない芭蕉の連句中の平句を踏んだものがいくつか見える。

禅小僧とうふに月の詩刻　桃青

（『俳諧次韵』「鷺の足五十韻・二ウ十一

侘禅師乾鮭に白頭の吟を彫　蕪村

（『新虚栗集』『句集』）

ねり物高く五歩に一楼　芭蕉

（『武蔵曲』錦とる百韻・二オ四）

五里に一舎かしこき使者を労て　蕪村

（『桃李』冬木たち歌仙・オ第三）

なお言えば、この歌仙「冬木たち」の発句と脇は、

冬木だち月骨髄に入る夜哉　几董

此句老杜が寒き腸　蕪村

当然これは『次韵』「鷺の足」五十韻の発句と脇、

鷺の足雉脛長く継添て　桃青

這句以二荘子一可レ見矣　其角

という挨拶ぶりのまねびだろう。安永九年の師弟は、延宝九年の師弟の詩霊に一礼してから、見交わして莞爾としたか。読者・私も思わずにんまりしたくなったりする。

耳うとく妹が告たる時鳥　芭蕉

（『俳諧一橋』花咲きて歌仙・ナオ五）

耳うとき父入道よほととぎす　蕪村

（『新花摘』）

ほとんど剽窃だと怒る人も居そうな。しかし私は、なんとなく濃く暗い性の匂いのする芭蕉の時鳥より、蕪村の、父子の哀切の方が透明感があって好きである。

かかえし琴の膝や重たき　芭蕉

（『伊達衣』かくれ家や歌仙・ナオ四）

ゆく春やおもたき琵琶の抱きごゝろ　蕪村

（『五車反古』）

ここでも、芭蕉の短句のしたたかな物量感と肉感をもつ各語が柔らかく抱きとめられ、輪郭のさだかならぬ暮春の倦怠へと遷される。むろんこの場合、季語の功はかなり大きい。

このほか、芭蕉周辺の作者の句を踏む作も、蕪村にはある。

梅まだ苦　匂ひなりけり　コ斎

（『鶴の歩』日の春を百韻・ナオ四）

新米もまだ草の実の匂ひ哉　蕪村

（『新五子稿』）

高紐に甲をかけて秋の風　自笑

（『千鳥掛』星崎の歌仙・ウ七）

高紐にかくる兜や風薫る　蕪村

（『落日庵句集』・明和五年句稿）

ところで、蕪村のベストテンには必ず入るはずの次の二句、

路たえて香にせまり咲いばらかな

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら

これを、『俳諧次韵』「世に有て」百韻三折裏第十三句、

松茸に道しまがへば枯いばら　楊水

を土壌としてひらいた芳菲だ、と見るのは、あるいは私のゆきすぎかもしれず、どこが似ている！　と言われそうだが。

郷愁の詩人の心象に、花いばらは美しい。

花いばら故郷の路に似たる哉

それはおそらく摂州毛馬村。そして、雪五尺のつひのすみかに帰る人にこの句がある。

故郷やよるもさはるも茨の花　ま、子一茶

（詩人）

§ 季語についてのアンケート§

① 季語の見直しということが言われていますが、現代の感覚にマッチしていないと思われる季語、季感の乏しい季語があれば挙げてください。

② 現在歳時記にはのっていないけれども、季語としてとりあげてはどうかと思われる言葉がありましたら挙げてください。

【季節感のズレ、季節感のないもの】

新入生	晩春に（卒業は仲春に）	入学＝仲春の季戻りが避けられ助かるのだが・・。
入学	晩春に（入学試験は仲春に）	季語を外す。絵踏みは過去の行事として初春に。
進級	晩春に（進級試験は仲春に）	季語としない。新内ながしは晩夏に。
踊り	秋だと不自由	晩春ではなく初夏に
トマト	季感なし	不要
朝顔	初秋より晩夏に（夏休のもの）	〃
西瓜	秋では違和感	〃
焼酎	夏に限定するのはどうか	〃（長すぎる）
たなばた	夏の方がいい	〃
シクラメン	ポインセチアと同じ冬に	〃
終戦記念日	秋はおかしい	〃
甘酒	夏なんかのみたくない	〃
子供の日	春？夏？	〃
氷雨	夏というのは違和感がある	〃
凧揚げ	凧は春、凧揚げ新年は変	〃
花	三春としてもらうと、卒業・	〃
踏絵		〃
ながし		〃
水芭蕉		〃
登山		〃
春闘		〃
元政忌		〃
天皇誕生日		〃
種痘		〃
大掃除		〃
冷蔵庫		〃
敷紙		〃
集め汁		〃
薬降る		〃
鎌倉カーニバル		〃
姥等		〃
私大		〃
阿蘭陀渡る		〃
定斉売り		〃
毛見		〃
ぶらんこ	季感なし	〃
風船		〃
ハンカチーフ		〃
髪洗う		〃
バルコニー		〃
脚気		〃
バナナ		〃
美術展覧会		〃
消防車		〃
青写真		〃
サッカー		〃
クリスマス	仲冬でなく歳末では・・	

【歳時記に入れたいもの】

ナイター	（収録してある歳時記もある）
晴着	新年の春着に代えて
箱根駅伝	

他、ご意見として、「季語はふやす必要はない」「この作業をしてみて、自分が農村的民俗学的事柄にいかに遠い生活をしているか思いしらされました」「歳時記は全部OK。ことに中国からのもの、二十四節季、七十二候の言い回しが楽しい」「季寄せをみていると想像の中に瑞々しい感覚が戻ってくるようでうれしい」と、沢山のメッセージがありました。不都合という方は、季戻りを念頭に置いたご判断が多く、連句の方中心のアンケートの特徴でしょうか。芭蕉さんは「季節の一つもさがし出したらんは後世によき賜物なり」と言ってますが、加えよというご意見は意外と少ないですね。アンケートにご協力いただきました方々、有難うございました。

（編集部）

第十六回正式俳諧芭蕉忌

（第五十九回猫蚕会）

平成八年十月十六日

於　江東区芭蕉記念館

第一部　正式俳諧興行「冬籠り」

第二部　二十韻興行

役割		次第	
宗　匠	中田あかり	席入り	
脇宗匠	市野沢弘子	配硯	
副宗匠	大窪　瑞枝	献花	
執　筆	原田　千町	執筆呼び出し	
知　司	権頭　和弥	文台捌き	
副知司	峯田　政志	俳諧興行	
座配	橘　文子	花前	
座見	佐藤　良彌	献香	
花司	蒲原志げ子	花の句披露	
香元	梅田　利子	端作り	
配硯	五味　蓉子	吟声	
同	椿　紀子	文台返し	
同	八代　嫋	作品奉納	
老長	坂本　孝子	納硯	
		挨拶	
		退席	

脇起俳諧連歌

二十韻「冬籠り」

冬籠りまたよりそはん此のはしら　翁
　土間に幽けし残る虫の音　明雅
峡の里新幹線の待たれゐて　孝子
　防災ヘルの下は少年　弘子
月あかり千本銀杏に注連を張り　政志
　相撲甚句についほろほろと　文子
冷えた手が挟んで酔った頬にキス　紀子
　つまみ食ひするマダムボヴァリー　嫋
良薬は苦しと漢方中吊りに　蓉子
　英国の旗たたむ香港　瑞枝
川下り楽しむ旅に虹の橋　利子
　裸で探す綱玉の月　志げ子
一瞬の油断拳銃むけられる　和弥
　ひらりと葉裏返る街路樹　玲
若き娘の援助交際おおっぴら　良彌
　妻妾泣ける寒き葬列　歌子
猿山に新たなボスが名乗り上げ　守男
　入学試験合格の夢　ゑみこ
紅枝垂れわれ息づけば花そよぐ　あかり
　尉の面に春は闌　執筆

二十韻「桃青忌」　東　明雅　捌

たをやかに進左退右や桃青忌　明雅
　小流れに散る庵のさざんか　公子
週刊誌連載物を待ちかねて　侃勇
　子を連れてゆくピアノ教室　一恵
白樺の杜に月光すべり入る　侃子
　ちらりと見ゆる影は小牡鹿　千町
タイよりの嫁地芝居の主役なり　勇
　印画紙のごと少年の胸　町
神前に樽積み上げて峡の村　侃
　事前運動今が大詰め　勇
金策も出来ず入院ままならず　恵
　イーハトーブにこもる山姥　公
土蜘蛛は月つかまんと這ひ上り　勇
　忍び逢ふなり掛金の部屋　町
めまぜしてきのふのことは秘中の秘　恵
　さりげなく出す高齢者パス　同
湖深く夢紺碧の旅心　公
　風と戯れ揺るるふらここ　侃
銅像はフロックコート花の冷え　町
　三のお重に菜飯よそほふ　侃

平成八年十月十六日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

連衆　内田公子　猪瀬侃勇　須賀一恵

宮川侃子　原田千町

二十韻「しぐるるや」　浅賀 淑代　捌

しぐるるや古絵図にしるき猿子橋　淑代
傘をかしげて皮羽織のひと　和子
ラザーニアバターたっぷり焦がすらん友子　あや
ミットのまなかに受ける直球　研三
塔上にはためく国旗けふの月　和弥
芋茎御輿を担ぐふるさと　同
バンダナの少年に刺す赤い羽根　和
恋の火花か走る電流　代
南の島の星砂探しゐて　や
われもわれもと騒ぐ地ビール　三
天井の蠅取りリボンねぢれたり　和
ひょんなことしたあとの寂寥　三
女房から突きつけられた三行半　弥
環七一周とばす自転車　や
壺いっぱい芒を挿して芭蕉の忌　弥
焚火の月に詩を戴く　や
闘へる党首の顔も大画面　友
鷺鳥も鳴く貌鳥も鳴く　和
花の夢山姥などと呼ばれたし　友
銅鐸出だす春麗の里

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館
連衆　式田和子　田中友子　くのあや
細川研三　権頭和弥

二十韻「翁の忌」　久保田 庸子　捌

大川のたぷっと鳴りゐる翁の忌　庸子
水鳥に向け投げしパン屑　志げ子
厨にはバタ炒めする夫のゐて　哲
単身赴任借り上げの寮　良彌
銭湯の古屋根越しに月仰ぐ　泉子
野菊の如き娘追ひかけ　げ
秋愁ふけだるき声のディートリッヒ　彌
選挙の時は民を神様　哲
そろばんの占ひ吉とご託宣　泉
犬との散歩煙草一服　哲
更衣防腐剤の香ふりまきて　げ
裸身に月皓々と照る　哲
金髪に染めたあいつをひと目惚れ　泉
遁世菩薩援助交際　彌
サラエボの廃墟に子らは合唱す　哲
山峡の道酒の自販機　泉
病癒え絵筆再び夢叶ふ　げ
春の苺をデザートに出し　庸
千年の花守るとや若木植ゑ　彌
あるかなきかにもゆる陽炎　泉

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館
連衆　蒲原志げ子　中川哲　佐藤良彌
青木泉子

二十韻「時雨忌」　倉本 路子　捌

時雨忌の一座に侍る愉しさよ　路子
川を臨める冬ぬくき部屋　郁子
オートバイ街の埃を舞ひあげて　あかり
額に巻きし赤きバンダナ　英二
寝もやらず更待月を待ちわぶる　澄子
虫の音ひたと止る人影　二
益子焼のぐい呑ぐいと新走り　り
選挙間近に見えぬ政策　郁
レントゲン映りし影を切るといふ　り
ことろことろの鬼が泣いてる　路
縁日の夜店は夢をちりばめて　澄
月の涼しき山峡の村　郁
丁寧に隣のごみを掃いてやり　二
おくれ毛直す指のしなやか　り
淀殿に猿の近づく金の閨　澄
あはれ難波の枯葦の原　同
新世界第二楽章口ずさみ　郁
鶯を飼ふ祖父の横顔　同
乳母車幌に花びら降りかかり　り
まあるき餡を包む草餅　二

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館
連衆　東郁子　中田あかり　日高英二
八角澄子

二十韻「時雨忌」　杉山 壽子 捌

時雨忌や風と訪ひたる採茶庵　壽子
蕾のままに山茶花の枝　好敏
走り去るローカル線の尾の消えて　暁巳
ピッと音して受けるファックス　弘子
ゆるやかに刻を楽しむ月の客　紅舟
高きに登り慕情告げたり　かりん
後れ蚊は私のやう？と拗ねてみせ　巳
戸別に配る名古屋外郎　舟
病院で小学唱歌歌ふ爺　ん
猫背のなほるベッド売出す　敏
藍染めの浴衣脱ぎ捨て碁に興じ　舟
月の出るまで泳ぐ子供等　弘
拳銃と麻薬置く場を礼拝堂　敏
命の次に大切な男　弘
駆け落ちはどうにでもなれ振り向かず　舟
党首党員すべて消滅　敏
義理人情今は昔のことと言ひ　ん
原っぱ失せて霞む萬屋　巳
春毎に花追ふ旅の多くなり　弘
栄螺の殻で旨き酒呑む　巳

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　豊田好敏　島村暁巳　市野沢弘子
筒井紅舟　登坂かりん

二十韻「桃青忌」　須田 智恵 捌

大川の今日波立たず桃青忌　智恵
行きつ戻りつ軒の冬蜂　健悟
ファクシミリマニュアル見ては送りゐて　玲
無糖で甘きチョコレート買ふ　淳子
月のもと搬入の塑像ほどかれぬ　瑞枝
夜学の帰り待ち合はせする　英子
スワヒリでくどかれてゐるそぞろ寒　枝
ポケットで鳴る鍵のちゃらりと　淳
故郷へ新車初乗り母を乗せ　英
減税介護みんなやります　淳
人影の絶えたる町に湧く泉　悟
ケンケンパーに入る夏月　同
オクターブゆれて竪笛いつまでも　枝
つまの寝息にあらぬ忖度　玲
えもいえぬときめきもある尾行癖　悟
けもの道から地下鉄に乗る　玲
新宿につひにオープン高島屋　英
風船貰ひ吾子は御機嫌　淳
花吹雪浴びてひさごの酒を酌む　同
春の別れの幔幕を揚げ　枝

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　佛渕健悟　日高玲　上月淳子
大窪瑞枝　佐古英子

二十韻「冬浅く」　長崎 和代 捌

まみえたる翁の像や冬浅く　和代
紅葉散り初む箒目の庭　シズ
岬鼻すなどり船の巡り来て　清子
胴間声して話す赤銅　一恵
酌み交はす月を肴に果てもなし　守男
溢れ蚊拂ふ素振りして寄る　恵
ロザリオ祭額づけば又恋募り　清
ブランド物で破産寸前　同
党名が変はり主張は逆戻り　男
噴煙上ぐるふるさとの山　ズ
恐ろしや地震が来るぞと歩荷言ふ　恵
蛇の蛻を拾ひくる月　清
玄関で置屋のお内儀切火きる　恵
臍だしジーンズ彼と相乗り　同
マニュアルの通りにいかぬラヴシーン　男
揚げ幕の陰消火器が立つ　清
幼児のよちよち歩き赤い靴　ズ
開店祝に貰ふ風船　同
夢忽と覚めて此の世の花が見ゆ　清
ローカル線のうららかな旅　男

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　小野シズ　下鉢清子　山崎一恵
近藤守男

二十韻「小名木小春」　中島 啓世　捌

小名木小春芭蕉桐奚舟下り　啓世
今も変らぬ鴨の鳴く声　政志
煉瓦館シェフのスープの香に立ちて　麻子
ビジネス手帳ぴらぴらと繰る　孝子
きっぱりと雨上りたり望の月　志世子
抱けば露けしぬば玉の髪　紀子
惚気をり野葡萄食ったその口で　孝
ごった返しの国政選挙　志
天上のヤコブの梯子引き下ろし　紀
玉振る如きアリア朗々　政
白夜ゆく詩人は影を長くして　孝
孤島の月に呷る冷酒　政
待ちかねし集団見合腹くだし　紀
持参金には豚を三頭　孝
絵を抜けて幽霊帰る山襞に　同
地蔵が辻に空っ風吹く　紀
指先の運動麻雀囲む卓　麻
こごみを摘んで古戦場あと　政
訪ね来し楊貴妃桜花の精　麻
紋白蝶の高く舞ひ翔つ　志

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　峯田政志　内田麻子　坂本孝子
秋山志世子　椿紀子

二十韻「桃青忌」　吉村 ゑみこ　捌

歌膝のたをやめぶりや桃青忌　ゑみこ
朱極めたる鉢の萬両　水壺
店開き菓子屋の幟はためきて　久美子
通学の子の急ぐ坂道　碧
細明り読書する肩月に濡れ　文子
蜉蝣のごと残る面影　利子
半玉の意のままならぬそぞろ寒　利
元本割れの投資信託　美
イチローと仰木魔術を応援し　文
覚えきれないビール銘柄　美
小鰺刺急に降りくる渚沿ひ　碧
豆電球を吊す仮賭場　壺
難民の方便凍てつく淡き月　碧
女教師がチャドル投げ捨て　利
こつありてハード・ソフトの羽交ひ締め　壺
油絵の具に固まりし筆　文
鈍行にこだはる旅を退職後　美
父母の声霞む鐘より　壺
残雪のお山をのぞむ花の間　利
たてがみ靡き駈くる若駒　文

平成八年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

連衆　今宮水壺　副島久美子　松本碧
橘文子　梅田利子

文音

二十韻「傘寿かな」

蚊を殺し蠅を叩きて傘寿かな　明雅
草いきれする庭の箒目　哲
大柄な幾何学模様のシャツ借りて　凡
高速道路飛ばすR・V　郁子
摩天楼照らす朱盆のやうな月　雅
内気で晩稲年下の彼　凡
ぬくめ酒無理に飲ませて口割らせ　哲
響くサンバのリズムかろやか　郁
のんびりと「怠けもの」棲む森の奥　雅
縁覚声聞悟られぬまま　哲
古箪笥斜めになりて煤拂ひ　凡
座敷童子のひそむペーチカ　雅
手旗して大漁船の還り来る　郁
梅雨明けの月久しぶりねえ　凡
通り抜け出来ますの路地抜けられぬ　哲
巫山の夢のあとはスーパー　雅
六神丸つめて弥次喜多気儘旅　郁
焼蛤の香りたのしむ　凡
甲子園熱戦に湧く花の頃　郁
人さまざまにしばし惜春　哲

平成八年九月三日　起首
平成八年十一月二十三日　満尾

序破急

坂本 孝子

連句の命は付けと転じである。前句に対する付け味の良さと、三句目の絶妙な転じを繰り返すことにより、一巻の変化を楽しいものに編み上げてゆくわけだが、その流れの中にも序破急がなければならないと言う。

広辞苑によれば「序破急」とは「舞楽構成上の三区分のこと」であり、能や文楽等の芸能にも用いられている。舞楽において「序」は無拍子、「破」は中間部で緩徐な拍子、「急」は最終部で急速な拍子である。能の舞事においても同様である。

能や人形浄瑠璃などの脚本構成上の区分では、「序」は導入部、「破」は展開部、「急」は終結部。速度の序破急と一致するとは限らない。

また演出上の区分で言えば、「序」は事なくすらすらと、「破」は変化に富ませ、「急」は短く躍動的に演ずる。

能の一日の番組もこの原則によって作る。

能の番組

脇　能（「翁」がある時はそれに添える）

神が泰平を寿ぐ舞。「鶴亀」「高砂」「老松」等

二番目　修羅物「敦盛」「忠度」「頼政」等

三番目　美女の霊、草木の精などの優美な曲

「井筒」「江口」「杜若」等

四番目　狂女、武士、怨霊など主人公も曲の性格も様々で広範囲にわたる。

五番目（切能）鬼、畜類、天狗や王公の霊等

「融」「鞍馬天狗」「鵜飼」「紅葉狩」等

更に細かく申せば、謡の発声や仕舞の歩き方ひとつにも序破急があり、初めは静かに滑り出し、徐々に勢いを増し、その力が吸い消されるように止まると教えられている。以上のことを連句の歌仙に当てはめて見よう。

表六句は事もなくすらすらと。しかし、この中にも序破急があり、起句と脇の付合いは「序」、第三の転じは「破」即ち展開の初動と言えよう。五句目は月の定座であり当然折端が「急」となるわけであるが、連句辞典の「序破急」の項には「序から破へ、破から急へ移るにも、木に竹を接ぐようではいけない。滑らかに移るためには初折や名残の表の折端で前句の句勢を軽く受け止めて、裏面の折立で新局面を展開できるように橋渡しをしてやるような配慮が必要である」とある。能や文楽でもしかり。「序」の部分の「事なくすらすら」のなかにも次に如何なるドラマが展開されるかという緊張した予感をもって「破」の段にうつって行かねばならない。

ここでかの有名な能「松風」の例を引いて見よう。旅の僧が須磨の浦、松風、村雨の旧跡を訪うところが「序」。汐汲の姉妹が現れ、月光の下で美しく舞い謡う。そして一夜の宿を乞う旅僧に問われるままに、その昔の行平との恋の顛末を語るところまでが「破の一段」か。姉の松風は行平の形見の烏帽子狩衣を見るうちに心狂い、磯馴松を行平と思って慕い寄る。ここが「破の二段」の舞の見せ場である。やがて「関路の鳥も聲々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや、残るらん。松風ばかりや残るらん」と急の段が終結する。

さらにもっと分かり易い例で言えば「船弁慶」の能で、「破の一段」前シテは静御前で、弁慶に諫められ、泣く泣く義経と別れる舞、物語であり、「破の二段」の後シテは平知盛の幽霊となる。西海に沈んだ平家一門の怨みを連ねて義経に挑みかかり勇壮に立ち回る。「急」の部は弁慶が数珠を押し揉んで悪霊を追い払い、「跡白波とぞなりにける」といかにも急なる終結である。

連句において歌仙という形式がなぜ面白いかと言えば、まさにこの「破の一段」と「破の二段」、初裏と名残表の展開の二重構造にあると思う。「急」の段、つまり名残の裏について言えば、折立にはまだ「破の二段」の余勢がありながら、それも次第に消え夢から覚めるように。勢があり過ぎて挙句が急ブレーキでのめるようなのも困りますし、また疲れ果ててなかなか挙句に辿り着けず、苦し紛れに投げ出してしまうようなのも面白くありません。匂いの花を受け止める静かなひと足で留めたいものだと思います。

二度目の執筆役

杉山　壽子

熱田神宮の正式俳諧は『熱田万句』の中に寛永八年（一六三一）に興行されたと記されています。それは松永貞徳が京都で始めて興行をした二年後のことであり、明暦四年（一六五八）まで熱田神宮では続いていました。東明雅先生は『熱田万句』を再び読まれ、熱田神宮の俳諧の歴史の重みを再認識し、三百五十年の空白を経て今日桃雅会が文化的意義の深い郷土の文化を再興したということに大きな意義があると強調されました。桃雅会にとりましてはなによりの励ましの言葉と大変嬉しく思います。

平成四年九月二十二日の第一回目は、式田和子宗匠の朝日文化センター特別講演の一環で、学習発表会の感覚でした。今回の興行は歴史への思いを新たにし、空白を埋めるべく全員で協力しました。それは緊張の連続でした。失敗しながらも無事に執筆役を終えほっとしましたが、将来への重責も感じています。

明雅先生、和子宗匠、熱田神宮宮司岡本健治様、山田蓉様、川崎日出夫様を始め、多くの方々に感謝申し上げます。

熱田神宮奉納正式俳諧

歌仙「山茶花や」　細川研三　捌

山茶花や蕉風俳諧発祥地　東　明雅
冬の渚に吟行の人　式田和子
筋絞り伝統工芸継ぐ子にて　武村利子
クラクションの音部屋に届きぬ　田部みどり
鯊釣に友ゐぬもよし昼の月　山田歌子
水筒の茶を含む爽涼　佛渕健悟
赤い羽根もらふ手と手にテレパシー　猪子春治
女子学生の謎の微笑み　伊藤白雲
もの言へば男らしさの滲みだし　織田康子
院内感染日常の沙汰　浅井沙衣子
岸壁にいどむ仲間と気勢あげ　宮川侊子
米寿の杖に鈴をぶらさげ　長谷川芳子
月の出に埃拭って涼み台　高橋良風
麦笛ぴぴと鳴らすをかしさ田田宮かんばし
棚の上郷土玩具の独楽並ぶ　加藤治子
ホームページの顔写真良く　くのあや
参りませ木之花作久夜毘売命　村田治男
歌詠みあげて曲水の盃　鵜飼万千子
（以下略）

平成八年十一月十一日
於　熱田神宮龍影閣

＊連句と酒＊

「初夢」

中川　哲

去年の秋は新庄、井波、伊賀上野と連句の旅を続けた仕上げが、熱田神宮の正式俳諧への参加から翌日の琵琶湖東畔の素晴らしい清遊となった。

観音様の魅力に魂をとろかされ、能衣裳の復元の情熱に時間の経つのも忘れる思ひであった。桃雅会の皆さんにはお礼の申し上げようもない。

昼食の茶亭では「夜這ひ酒」といふ銘柄の酒。昔風の日本酒のしつこい感じがしたけれど、肴の根野菜、川魚の濃い味に馴染んですっかり堪能した。

旅から帰ったらすぐ木之元の銘酒「七本槍」が届けられた。軽く入院のつもりだったので封も切らなかった。

二日の初夢はその淡麗な酒が全部倅とその仲間たちによって飲み干されてしまったところで目が覚めた。

ああ、入院の前に一口でも飲んでおけばよかったのに。

◇ 猫簑会案内

連句会

○奉納正式俳諧

場所　亀戸天神社

江東区亀戸三ー六ー一

日時　四月二五日　一時より

正式俳諧のあと二十韻興行

○猫簑会

場所　江東区芭蕉記念館

日時　七月十六日　十二時より

歌仙興行

＊お詫びと訂正＊

前号「現代連句論のための序章」中、「中段十八行目「作者の詩」というところ「作者の死」に訂正します。

同人の氏原正雄氏が平成八年十二月二八日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

福田 眞空

杉内 徒司

岐阜で各務於兎、国島十雨に会った帰り、明雅教授と共に第四回落合句碑祭り（昭和四十九年八月六日）に参加した。

後年句碑祭りの行事記録を見ると、

「句碑祭りの式典のあと、落合茶屋に席を移し、清滝川でとれた鮎の酒を賞し、トリのスキヤキに舌鼓を打ち、歌仙を巻く・・・」とあるが、あの日の式典の内容については何も覚えていない。

式典が終わってから保津川沿いに車を馳せ、松本へ帰る明雅教授を京都駅へ送って別れ、私は北嵯峨の落柿舎へ向かった。

あの頃の私は義仲寺史跡保存会幹事をしていたので、落柿舎の行事にも成可く参加して欲しいと云われていたから、午後からの永井瓢斉三十回忌に向かったのだ。

永井瓢斉は大阪朝日記者。「天声人語」を永く担当。朝日の夕刊に「空海」連載中急死した直木三十五の後をうけ、「空海」を書き続けた名記者。退職後、俳誌「趣味」を主宰。後郷里島根市に疎開中空襲で爆死した文人である。

瓢斉忌が終わって、昭和天皇の元侍従・岡部長章の車で福田眞久（国士舘大学教授）と共に四条まで送られた。

過般眞空から、句集『天の川』を贈られ、また新聞で岡部長章の訃を読み、忘れていた事をいろいろ思い出した。

私は『俳諧人名辞典』『義仲寺と蝶夢』等の高木蒼梧翁の著作を沢山頂いていた義仲寺保存会大庭勝一常務にさそわれ、蒼梧翁一周忌（昭和四十六年六月二七日・於町田市青柳寺）に参列した。施主の高木厚子さん（南林間幼稚園主）のほか、その折福田眞空東横女子短大助教授、岡部長章淑徳学園教授に初めてお会いした。

同じ年の八月十二日、眞空は落柿舎十一世工藤芝蘭子宗匠（四十六年三月十日逝去・八十一歳）の遺志をついで芭蕉の最後の句、

清滝や波に散り込む青松葉

の句碑を建立除幕している。

爾来一関東に住む氏が毎年西下され、二十年以上も続けて主催されてきたことも尋常の人に出来ることではないとひそかに敬服してをります。そしてこの事は、学究としての氏が日本の古典に学び芭蕉に学ぶといふ敬虔な慎みを持して長年亘って展開されてゐる独自の人格的文芸論とも無縁ではないと思います」

（『天の川』序に代へて・柳井道弘）

眞空はこのほか、毎月出身地の佐渡ケ島畑野町に出かけ「天の川連句会」指導に当り、更に各地の連句人に呼びかけ、平成五年から連句興行後に天の川を賞でる「天の川を見る会」を開催しているという。

質問コーナー

東　明雅

【Q】新年の季語は連句の付合の上ではどのように扱えばよいのでしょうか。冬季の一部と考えるのでしょうか。独立した季語と考えるのでしょうか。

【A】明治五年（一八七二）十一月、明治政府は従来の太陰暦を廃して、太陽暦を採用する布告を出しました。それで、暦の七十二候によって春を二月からとし、それによって春夏秋冬と四つに割りふる事が考えられ、今日に及んでおります。しかし、ここで問題となったのは新年をどう取り扱うかであります。新年を冬とするのは、どうしても国民感情になじみません。新年はどうしても新春であり、千代の春であり、今日の春であり、冬ではどうしてもおめでたい気分が湧かないのであります。

それで、四睡庵壷公という俳諧師が「ねぶりのひま」という俳諧選集の中で、「抑も二月を初春とすれば、一月は冬なり。されども年のはじめならば、その言葉なくては叶はず」として、新年の季題を別格とし、四季の前におくことにしたのでありました。これが今日まで多くの歳時記・季寄せに受けつがれて来ております。

山本健吉の季寄せは春・夏・秋・冬をそれぞれ三月にわたるものと、初・仲・晩の四部門に分けているので、連句を作るものに取っては極めて重宝でありますが、この季寄せも新年の部を独立させるとともに、冬の部には、初冬・仲冬・晩冬の外に、歳末という部門を設けています。即ち、初冬はほぼ陽暦十一月、仲冬は陽暦十二月、晩冬は陽暦一月でありますが、歳末は陽暦十二月十三日以後の季語で、新年の季語とはっきり区別のできるものを集めております。

それ故、新年の発句に対して、脇は必ず新年であるべきことは当然でありますが、第三に初冬・仲冬を出すのは、どうしても季戻りの感があるので遠慮すべきでしょう。

また、明治以来の連句では、発句（新年）・脇（新年）に対して第三は春を付けながら、四句目（雑）・五句目（秋の月）と続けた作品を多く見る事が出来ますが、これは旧暦で新年が春だった名残が現れているのでしょう。

芦丈先生は、発句新年、脇新年、第三春、四句目春、五句目（春の月）という形を守られながらも、第三以下五句目までの句の中には、なるべく春という文字を表に出さぬようにして作れと教えられましたが、これも新年は実際は冬なのだというイメージをいささかでも払拭しようとされたのだと思います。

結局、新年は明治以後、春から独立した季語となりましたが、時期的に見ると歳末と晩冬の間に挿まれておりますので、冬の一部と見る事もできるのであります。

◇　猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

五千円　おおたけんのすけ
一万円　筒井紅舟
五千円　日本語を語る会（守屋）
十口　若尾よしえ　（敬称略）

◇　基金の口座　富士銀行新宿西口支店
普通３３７６０４５　猫蓑基金

……§……§……

あとがき

○　明けましておめでとうございます。

○　丑年です。昨年のウシは狂牛病とやらで散々でしたが、今年はゆったり鷹揚な一年であってほしいものです。

○「加えてはいけない　引いてもいけない」。某ウィスキーのコピーのようだが、歳時記の見直しをしていくと、文字通りバイブルのようなその重さに驚嘆する。歳時記の根ッコにあるものに、今年は触れてみたい。

季刊　「ねこみの通信」第二十六号
発行者　猫蓑連句会
編集人　〒一九五　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ